

四紀行集

松尾芭蕉

目次

野ざらし紀行（甲子吟行）

鹿島紀行

笈の小文

更科紀行

14 8 6 1

野ざらし紀行（甲子吟行）

千里に旅立ちて路糧をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の声そゞる寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせかへつて江戸をさす古郷

関越ゆる日は、雨降りて、山みな雲に隠れけり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

何某千里といひけるは、此たび路のたすけとなりて、万いたはり心を尽し侍る。常に莫逆の交ふかく、朋友に信あるかな此の人。

深川や芭蕉を富士に預け行く 千里

富士川のほとりを行くに、三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり。此の川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨て置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひや散るらん、あすや萎れんと、袂より喰物投げて通るに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。たゞこれ天にして、汝が性の拙なきを泣け。大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川 千里

眼前

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日余りの月のかすかに見えて、山の根ぎはいと闇きに、馬上に鞭を垂れて、数里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の残夢、小夜の中山に到りて忽ち驚く。

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

松葉屋風瀑が伊勢に有りけるを尋ね音信れて、十日ばかり足を留む。

暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の鳥居の陰ほのぐらく、御燈
処々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむばかり深き心を
起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

腰間に寸鉄を帯びず、襟に一囊を懸けて、手に十八の珠を携ふ。
僧に似て塵あり。俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、鬢
なきものは浮屠の属にたくへて、神前に入るをゆるさず。

西行谷の麓に流れあり。女どもの芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其の日のかへさ、ある茶屋に立寄りけるに、てふといひける女
あが名に発句せよと言ひて、白き絹出しけるに書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて

蔦植えて竹四五本のあらし哉

長月の初め故郷に帰りて、北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡
だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、
たゞ命有りてとのみ言ひて言葉はなきに、兄（このかみ）の守袋
をほごきて、母の白髪をがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もや
ゝ老いたりと、しばらく泣きて、

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜

大和の国に行脚して、葛下の郡竹の内と云ふ所にいたる。此処
は例の千里が旧里なれば、日頃とゞまりて足を休む。

藪より奥に家あり

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

二上山当麻寺に詣でて、庭上の松を見るに、凡そ千歳も経たる
ならん。大いさ牛をかくすともいふべけん。かれ非情といへども、
仏縁にひかれて、斧斤の罪を免がれたるぞ幸にしてたつとし。

僧朝顔いく死にかへる法の松

独り吉野の奥に辿りけるに、まことに山深く白雲峯に重なり、
煙雨谷を埋んで、山賤の家所々にちひさく、西に木を伐る音東に
響き、院々の鐘の声心の底にこたふ。昔より此の山に入りて世を
忘れたる人の、多くは詩にのがれ、歌に隠る。いでや唐土の廬山
といはんも亦むべならずや。

ある坊に一夜をかりて

砧打つて我に聞せよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町ばかり分け入る
ほど、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、嶮しき谷を隔てたるい
とたふとし。かのとく／＼の清水は昔にかはらずと見えて、今も

とくくくと露を落ちける。

露とくくくとこころみに浮世すくがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必ず口を漱がん。もしこれ許由に告げば、耳を洗はん。山を登り坂を下るに、秋の日すでに斜になれば、名ある所々見残して、まづ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を経てしのぶは何を忍草

大和より山城を経て、近江路に入て美濃に至るに、今須・山中を過ぎて、いにしへ常盤の塚あり。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋風とは、いづれの処か似たりけん。我もまた、

義朝の心に似たりあきの風

不破

秋風や藪も畠も不破の関

大垣にとまりける夜は、木因が家があるじとす。武蔵野を出でし時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

桑名本当寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

草の枕に寝あきて、まだほの暗き中に、浜のかたへ出でて、

曙やしら魚白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草むらに隠る。かしこに縄を張りて、小社の跡をしるし、ここに石を据えて、其の神と名のる。蓬・葱心のまゝに生えたるぞ、なかくくにめでたきよりも心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅買ふやどり哉

名護屋に入る道のほど諷吟す

狂句木がらしの身は竹斎に似たる哉

草枕犬も時雨るゝか夜の声

雪見にありきて

市人よこの笠売らう雪の傘

旅人を見る

馬をさへながむる雪の朝かな

海辺に日暮して

海くれて鴨の声ほのかに白し

爰に草鞋をとき、かしこに杖をすてて、旅寝ながらに年のくれければ、

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といひくも山家に年を越して、

誰が賀ぞ齒梁に餅おふつしの年

奈良に出づる道のほど

春なれや名もなき山の朝霞

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓の音

京に登りて三井秋風が鳴滝の山家をとふ。

梅林

梅白し昨日や鶴をぬすまれし

檜の木の花にかまはぬすがたかな

伏見西岸寺任口上人に逢うて

我が衣にふしみの桃の雫せよ

大津に出づる道、山路を越えて

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼるにて

昼の休らひとて旅店に腰をかけて

躑躅いけてその蔭に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

水口にて廿年を経て古人に逢ふ

命二つ中に活たる桜かな

伊豆の国蛭が小島の桑門、これも去年の秋より行脚しけるに、我が名を聞きて草の枕の道づれにもと、尾張の国まで跡を慕ひ来たりければ、

いざともに穂麦くらはん草枕

此の僧我に告げて曰、円覚寺大願和尚、ことしむ月のはじめ、遷化し給ふよし。まことや夢の心地せらるゝに、まつ道より其角が方へ申し遣しける。

梅恋ひて卯の花拝む涙かな

贈杜国子

白けしに羽もぐ蝶のかたみ哉

二度桐葉子がもとに有りて、今や東に下らんとするに、

牡丹薬ふかく分け出る蜂の名残哉

甲斐の国の山家に立ち寄りて、

行く駒の麦に慰むやどりかな

卯月の末いほりに帰り、旅のつかれをはらす。

夏ごろもいまだ風をとり尽さず

昭和十四年六月十五日第一刷印刷

株式会社 日本評論社

鹿島紀行

一 洛の貞室、須磨の浦の月見にゆきて、「松かげや月は三五夜中納言」と云けん、狂夫のむかしもなつかしきままに、此秋かしまの山の月見んと、思ひ立つことあり。伴ふ人ふたり、浪客の士ひとり、一人は水雲の僧。ひとりはからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋を衿に打かけ、出山の尊像を厨子にあげめ入てうしろにせおひ、杖引ならして、無門の関もさはるものなく、あめつちに独歩して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの鳥なき島にもわたりぬべく、門より舟にのりて、行徳と云処に至る。

二 舟をあがれば、馬にもものらず、細腰のちからをためさんと、かちよりぞゆく。甲斐国より或人のえさせたるひの木もてつくれる笠を、おのおのいただきよそひて、やはたと云里を過れば、かまかいが原と云ひろき野あり。秦甸の千里とかや、目もはるかに見わたさる。筑波山むかふに高く、二峰並び立り。かの唐土に双剣のみねありと聞えしは、廬山の一隅なり。

雪は申さずまづむらさきのつくば哉

と詠しは、我門人嵐雪が句なり。すべて此山は日本武尊のことばをつたへて、連歌する人のはじめにも名付たり。和歌なくば有べからず、句なくば過べからず。まことに愛すべき山のすがたなりけらし。

三 萩は錦を地にしけらんやうにて、為仲が長櫃に折入て、都のつとに持せたるも、風流にくからず。きちかう・女郎花・かる

かや・尾花みだれあひて、小男鹿のつまこひわたる、いとあはれ也。野の駒、処えがほ(得顔)にむれありく、又あはれ也。日既に暮かかると云ものをたくみて、武江の市にひさぐものあり。宵のほど、其漁家に入てやすらふ。よるのやどなまぐさし。月くまなくはれるままに、夜ふねさし下して、鹿島に至る。ひるより雨しきりに降て、月見るべくもあらず。

四 麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此処におはしけると云を聞て、尋ね入て臥ぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清浄の心をうるに似たり。暁の空いささかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人々起出ぬ。月の光、雨の音、只あはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はるばると月見に来たるかひなきこそ、ほいなきわざなれ。かの何がしの女すら、時鳥の歌えよまで帰りわづらひしも、我ためにはよき荷担の人ならんかし。

おりおりにかはらぬ空の月かげも

ちぢのながめは雲のまにまに

月はやし梢は雨を持たながら

寺にねてまことがほなる月見かな

雨にねて竹おきかへる月見かな

月さびし堂の軒端の雨しづく

和尚

桃青

桃青

曾良

宗波

五 神前

此松の実ばえせし代や神の秋

桃青

ぬぐはばや石のおましの苔の露

宗波

膝折やかしこまりなく鹿の声

曾良

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋

桃青

夜田かりに我やとはれん里の月

宗波

賤の子や稲すりかけて月をみる

桃青

芋の葉や月まつ里の焼ばたけ

桃青

野

ももひきや一花すりの萩ごろも

曾良

花の秋草にくひあく野馬かな

曾良

萩原や一夜はやどせ山の犬

桃青

帰路自準に宿す

峙せよわら干宿の友すずめ

主人

秋をこめたるくねのさし杉

客

月見んと汐ひきのぼる舟とめて

曾良

貞享丁卯仲秋末五日
定本芭蕉大成(編著尾形仿ほか三省堂昭和43年)

笈の小文

百骸九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりこととなす。ある時は倦みて放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人に勝たむ事を誇り、是非胸中に戦つて是が為に身安からず。暫く身を立てむ事を願へども、これが為にさへられ、暫く学んで愚を曉ん事を思へども、是が為に破られ、終に無能無芸にして只此の一筋に繋る。西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休が茶における其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化に随ひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。像花かたちにあらずる時は夷狄にひとし。心花にあらずる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化に随ひ造化に帰れとなり。

神無月の初空、定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我が名よばれん初しぐれ

又山茶花を宿々にして

岩城の住、長太郎と云ふもの此の脇を付けて其角亭において関送りせんともてなす。

時は冬よしのをこめん旅のつと

此の句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初として、旧友、親疎、門人等、あるは詩歌文章をもて訪ひ、あるは

草鞋の料を包みて志を見ず。かの三月の糧を集むるに力を入れず、紙布・綿小などいふもの、帽子・したうづやつもの、心々に送りつとひて、霜雪の寒苦を厭ふに心なし。あるは小船をつかべ、別墅にまつけし草庵に酒肴携へ来りて、行衛を祝し、名残を惜しみなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覚えられけれ。

抑々道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の文をふるひ情を尽してより、余は皆佛似通ひて、其の糟粕を改むる事能はず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其の日は雨降り、昼より晴れて、そこに松あり、かしこに何と云ふ川流れたりなどいふ事、誰々もいふべく覚え侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云ふ事なけれ。されども其の所々の風景心に残り、山館・野亭の苦しき愁も、かつは話の種となり、風雲のたよりも思ひなして、忘れぬ所々跡や先やと書き集め侍るぞ、猶酔へる者の猛語にひとしく、寝ねる人の讒言する類に見なして、人又亡聴せよ。

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

飛鳥井雅章公の此の宿に泊らせ給ひて、「都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてて」と、詠じ給ひけるを自ら書かせ給ひて、賜はりける由を語るに、

京まではまだ半空や雪の雲

三川の国保美といふ処に、杜国が忍びて有りけるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡さまに二十五里尋ね歸りて、其の夜吉田に泊る。

寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手、田の中に細道ありて、海より吹上ぐる風いと寒き所なり。

冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ吉里ばかりも有るべし。三河の国の地つゞきにて、伊勢とは海隔てたる所なれども、いかなる故にか、万葉集には伊勢の名所の内に撰び入れられたり。此の洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山と云ふは鷹を打つ処なり。南の海の果にて、鷹の初めて渡る所と云へり。いらご鷹など歌にもよめりけりと思へば、猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付て嬉しいらご崎

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬左の人々に迎ひとられて、暫く休息する程、

箱根越す人も有るらし今朝の雪

ある人の会

ためつけて雪見にまかるかみこ哉

いざ行かむ雪見にころぶ所まで

ある人興行

香を探る梅に蔵見る軒端哉

此の間美濃・大垣・岐阜のすきものとぶらひ来りて、歌仙、あるは一折など度々に及ぶ。師走十日余り、名古屋を出でて旧里に入らんとす。

旅寝してみしやうき世の煤はらひ

桑名よりくはで来ぬればと云ひ、日永の里より馬借りて杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ちぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物づさのあまり云ひ出で侍れども、終に季ことば入らず。

旧里や臍の緒に泣くとしの暮

宵のとし空の名残惜しまむと、酒呑み夜更かして、元日寝忘れたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初春

春立ちてまだ九日の野山哉

枯芝ややくかげらふの一二寸

伊賀の国阿波の庄といふ所に、俊乗上人の旧跡有り。護峰山新大仏寺とかや云ふ名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶えて田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の緑に埋もれて、御ぐしのみ現前と拝まれさせ給ふに、聖人の御影はまだ全くおはしまし侍るぞ、其の代の名残疑ふ所なく、泪こぼるゝばかりなり。石の蓮台、獅子の座などは、蓬・葎の上に堆く、双林の枯れたる跡もまのあたりにこそ覚えられけれ。

丈六にかげらふ高し石の上

さまざまの事ももひ出す桜哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂哉

裸にはまだ衣更着の嵐哉

菩提山

此の山のかなしさ告げよ野老掘

龍尚舎

物の名を先づとふ蘆の若葉哉

網代民部雪堂に会

梅の木になほやどり木や梅の花

草庵会

いも植えて門は葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有る事にやと神司などに尋ね侍れば、只何とはなしおのづから梅一もともなくて、子良の館の後に、一もと侍る由を語り伝ふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけず涅槃像

弥生半ば過ぐる程、そゞろに浮き立つ心の花の、我を導く枝折となりて、吉野の花に思ひ立たんとするに、かの伊良古崎にて契り置きし人の伊勢にて出迎ひ、共に旅寝のあはれをも見、かつは我が為に童子となりて、道の便りにもならんと、自ら万菊丸と名をいふ。まことに童らしき名のさまいと興有り。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せうぞ檜の木笠

よし野にて我も見せうぞ檜の木笠

万菊丸

旅の具多きは道ざはりなりと、物皆払ひ捨てたれども、夜の料
にと紙衣かみこきつ、合羽やうの物、硯、筆、紙、薬等、ひるげ屋笥ひるげなど物
に包みて、後に背負ひたれば、いとうづね脛弱うづねく力なき身の跡さまに
ひかふるやうにて、道なほ進まず。たゞ物つき事のみ多し。

草臥れて宿かる頃や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨

万菊

葛城山

猶みたし花に明け行く神の顔

三輪 多武峯

躰峠 多武峯ヨリ龍門へ越入道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

龍門

龍門の花や上戸の土産つとにせん

酒のみに語らんかゝる滝の花

西河

ほろくくと山吹ちるか滝の音

蜻蛉が滝

布留の滝は布留の宮より二十五丁山の奥也。

津国幾田の川上に有

大和

布引の滝 箕面の滝 勝尾寺へ越る道に有り。

桜

桜がりきどくや日々五里六里

日は花に暮て淋しやあすならん

扇にて酒くむかげやちる桜

苔清水

春雨の木下につたふ清水哉

吉野の花に三日とどまりて、曙黄昏のけしきに向ひ、有明の月の
哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは摂政公のながめに
奪はれ、西行の枝折に迷ひ、かの貞室が是はくくと打ちなぐりた
るに、我いはん言葉もなく、いたづらに口を閉ぢたるいと口をし。
思ひ立ちたる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

高野

ちくはくのしきりにこひし雉の声

散る花にたぶさはづかし奥の院 万菊

和歌

行く春にわかぬ浦にて追付きたり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかる
時はいきまきし聖の事心に浮ぶ。山野海浜の美景に造化の功を見
あるは無依の道者の跡を慕ひ、風情の人の実をうかがふ。猶栖を
去りて器物の願ひなし。空手なれば途中の愁もなし。寛歩駕籠に
かへ、晚食肉よりも甘し。とまるべき道に限りなく、立つべき朝
に時なし。只一日の願ひ二つのみ。今宵よき宿からん、草鞋のわ
が足に宜しきを求めんとばかりは、いさゝかの思ひなり。時々氣
を転じ日々に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出合ひた
る悦限りなし。日頃は古めかしくかたくななりと、悪み捨てたる
程の人も、辺土の道づれに語りあひ、埴生葎のうちにて見出した
るなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物
にも書付け人にも語らんと思ふぞ、又是旅の一つなりかし。

衣更

一つぬいで後に負ひぬ衣がへ

吉野出て布子売りたし衣がへ 万菊

灌仏の日は奈良にて爰かしく詣で侍るに、鹿の子を産むを見て、
此の日においてをかしければ、

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎ給ひ、御
目のうち塩風吹入て、終に御目盲ひさせ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはばや

旧友に奈良にて別る

鹿の角先づ一節の別れかな

大坂にてある人の許にて

杜若語るも旅のひとつ哉

須磨

月はあれど留守のやう也須磨の夏

月見ても物たらずや須磨の夏

卯月中頃の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいと艶
なるに、山は若葉に黒みかゝりて、時鳥鳴き出づべきしのめ
も、海の方よりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は、麦の穂波

あからみあひて、漁人の軒近き芥子の花の、たえぐに見渡さる。

海士の顔先づ見らるゝやけしの花

東須磨・西須磨・浜須磨と三所に分れて、あながちに何わざするとも見えず。藻塩たれつゝなど歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなども見えず、きすごとといふ魚を網して、真砂の上に干し散らしけるを、鳥の飛び来りてつかみ去る。是をにくみて弓をもておどすぞ海士のわざとも見えず。もし古戦場の名残をとめて、かゝる事をなすにやといと罪深く、猶昔の恋しきまゝに、鉄枴が峯に上らんとする、導きする子の苦しがりて、とかく言ひ紛らはすを様々にすかして、麓の茶店にて物食はすべきなど云ひて、わりなき体に見えたり。彼は十六と云ひけん里の童子よりは、四つばかりも弟なるべきを、数百丈の先達として、羊腸険岨の岩根を這ひ登れば、にり落ちぬべき事あまたたびなりけるを、躑躅根笹に取りつき、息を切らし汗をひたして、漸く雲門に入ること心もとなき導師の力なりけらし。

須磨の蟹の矢先に鳴くか郭公

ほととぎす消え行く方や嶋一つ

須磨寺や吹かぬ笛聞く木下やみ

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや。此の浦の実は秋をむねとするなるべし。悲しさ淋しさ、云はむかたなく、秋なりせばいささか心のはしをもいひ出づべき物と思ふぞ、我が心匠の拙きを知らぬに似たり。淡路嶋手に取るやうに見えて、須磨・明石の海右左に分る。呉楚東南の詠もかゝる所にや。物知れる人の見侍らば、さまぐの境にも思ひなぞらふるべし。又後の方に山を隔てて田井の畑といふ所、松風・村雨故郷といへり。尾上つゞき丹波路へ通ふ道あり。鉢伏のぞき、逆落など恐ろしき名のみ残りて、鐘懸松より見下すに、一の谷内裏やしき目の下に見ゆ。其の代の乱れ其の時の騒ぎ、さながら心に浮び倂につどひて、二位の尼君、皇子を抱き奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有様、内侍局・女孺・曹子のたぐひ、さまぐの御調度もて扱ひ、琵琶・琴などしとね蒲団にくるみて船中に投げ入れ、供御はこぼれてうるぐづの餌となり、櫂笥は乱れて海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしび此の浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。

昭和十四年六月十五日第一刷印刷

株式会社 日本評論社

更科紀行

さらしなの里、姨捨山の月見んこと、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、俱に風雲の情を狂すもの又ひとり、越人と云。木曾路は山深く道さかしく、旅寐の力も心もとなしと、荷今子が奴僕をして送らす。おのくこころざし尽すといへども、駅旅の事心えぬさまにて、ともにおぼつかなく、物ごとのしどろに跡さきなるも、なかくにおかしき事のみ多し。

何々と云処にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげもおかしげもあらず、只むつくとしたるが、腰たわむまで物おひ、息はせはしく、足はぎざむやうにあゆみ来れるを、伴ひける人のあはれがりて、おのく肩にかけたる物ども、かの僧のおひね物と一にからみて、馬につて我を其上にのす。高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大河ながれ、岸下千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず。只あやぶき煩ひのみやむ時なし。

かけはし、ねざめなど過て、猿が馬場たち峠などは、四十八まがりとかや、九折かさなりて、雲路にたどる心地せらる。かちよりゆくものさへ、めくるめき、たましひしほみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず、馬の上にてたゞねぶりに眠りて、落ぬべき事あまたたびなりけるを、跡より見あげて危き事がぎりなし。仏の御心に、衆生のうき世を見給ふも、かゝる事にやと、無常迅速のいそがはしきも、我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。

夜は草の枕をもとめて、ひるのうち思ひまうけたるけしき、結び捨たる発句など、矢立取出て、燈のもとに目をとど頭をたゞきてうめきふせば、かの道心の坊、旅懐の心うつて物思ひするにやと推量し、我を慰んとす。わかき時拝みめぐりたる地、あみ

だの尊き数を尽し、おのがあやしと思ひし事ども、嘶つゝくるぞ、風情のさはりと成て、何を云出ることもせず。とてもまぎれたる月影の、壁の破れより木間がくれにさし入て、引板の音、鹿おふ声、処く聞えける。まことに悲しき秋のこころ、ここに尽せり。いでや月のあるじに酒ふるまはんといへば、盃持出たり。よのつねに一めぐりも大きに見えて、ふつゝかなる時絵をしたり。都の人は斯るものは風情なしとて、手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ輿に入て、琬玉卮の心地せらるゝも処がら也。

あの中に蒔絵書たし宿の月

かけはしやいのちをからむ蔦がづら

かけはしやまづおもひ出駒むかひ

霧はれて棧は目もふさがれず 越人

姨捨山は八幡と云里より一里ばかり南に、西南に横をれてすさまじく高くもあらず、かどくしき岩なども見えず、只あはれ深き山のすがたなり。なぐさめかねしといひけんもことわりしられて、そゞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いと涙も落そひければ、(原本此一段なし。一本によりて補ひたり)

倂や姨ひとり泣月の友

いざよひもまだ更科の郡かな

更科や三よさの月見雲もなし 越人

ひよろ／＼と猶露けしやをみなへし

身にしみて大根からし秋の風

木曾の椽つき世の人の土産かな

送られつ別れつはては木曾の秋

(「送られつおくりつ」をよすとす)

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

吹飛す石は浅間の野分かな

此紀行終て後、乙州以謂、猶翁之友文かさね及び鳥の賦、集く
に洩ぬることを惜み、後集を加ンとおもひ企ぬ。

宝永六年孟春慶旦

江南杙々庵乙州梓之

書林 二条通高倉東へ入ル町

平野屋佐兵衛開版

昭和四年四月二十九日印刷

日本名著全集刊行会